

(研究ノート)

コロナ後のバングラデシュ農村を歩く(2)

―フィールドノート・ロングプル管区編―

須田敏彦

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」とする）のパンデミックが終息に近づいた 2023 年 3 月、4 年ぶりにバングラデシュとインドの農村を歩いた。飛行機でバングラデシュ首都のダカから入り、海外出稼ぎ者が多く比較的豊かなバングラデシュ南東部のクミッタ県に移動して農村調査をした後、自動車です約 400 キロ北上し北西部のバングラデシュ最貧困地域ロングプル管区に移動し、洪水が常襲する農村を中心にフィールドワークを行った。それから首都ダカを経てインド西ベンガル州の州都コルカタへ移動し、80 キロほど北に位置する農村でフィールドワークを実施した。二週間ほどの短い調査であったが、長く続いたコロナのパンデミックの末期であること、また、成長著しく貧困から抜け出ようとしているバングラデシュとインドの農村の記録であることから、フィールドで得た情報をこのような形で公表することには意味があると思う。

このうち、バングラデシュのクミッタ県での農村調査で得た見聞は、前号の「コロナ後のバングラデシュ農村を歩く―フィールドノート・クミッタ県編―」に記されている（須田 2024）。その続編である本稿は、主にロングプル管区でのフィールドワークの記録である。記述に当たっては、現在のバングラデシュの急速な成長の原動力となっている輸出向け製造業の発展と海外出稼ぎを中心とし、相対的に豊かなクミッタ県と貧困地域ロングプル管区の関係、農業の変化とジェンダーの問題、また日本とバングラデシュの関係についても注目して論じた。

2. フィールドノート：ロングブル管区を中心とした調査記録

① 2023年3月11日深夜。ロングブル市内のホテル

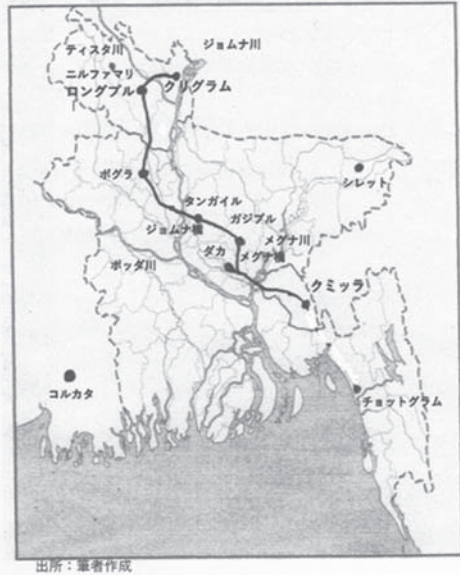
クミッタからロングブルに向かう途上

今日は朝 7 時に、クミッタでかつて私が青年海外協力隊員として勤務し、今回も農村調査のため滞在していたクミッタ県の BARD (Bangladesh Rural Development Academy) のホステルを出発した。古くからの知人で BARD の公用車の運転手をしているタポーシュが手配してくれたトヨタのハイエースに乗って、北西部

ロングブル管区を中心都市ロングブル市内のホテルに到着したのは夜 7 時 30 分だった。12 時間以上の長旅だ。走行距離は 420 キロに達した。クミッタからダカまでは、港湾都市で Bangladesh 第二の都市チッタゴン (Chittagong) とダカを結ぶ国道 1 号線を順調に猛スピードで走った。この道はよく整備されていて、かつて交通の障害となっていた二つの大きな川、 Gumti River と Meghna River は 1990 年代に日本の援助で作られた橋であつたという間に通り過ぎ⁽¹⁾、ダカ手前までは渋滞もなくスムーズに到達することができた。

この大きな道路は私が青年海外協力隊員として BARD に滞在していた 1988 年～90 年には大規模な建設工事中で、ダカを結ぶ道路は大変な悪路だった。しかも当時は Gumti Bridge も Meghna Bridge もなく、乗っていたバスが

図1 バングラデシュの地図と移動経路



二つの川を渡るため 2 回フェリー（渡し船）に乗り込むのに、道路が混雑する時には何時間も待たされた。その代わり、フェリーでグムティ川とメグナ川を渡るときには、当時川面にたくさん浮かんでいた色とりどりのつぎはぎだらけの帆掛け船を眺めたり、運が良ければ息継ぎのため水面に浮上するのが見られる川イルカを探し、渡河の楽しみとしたものである。それが 1990 年代に完成した二つの橋のおかげで、今は大きな川の存在をほとんど意識することもなく渡ってしまう。

今日は、ダカ手前までは順調に到着したが、ダカ市内に入ると渋滞が予想されたため、私と案内人で BARD 元調査員のジャラル氏、そして運転手のイブラヒム氏を乗せた車はダカ市を迂回して北上し、まず輸出向け縫製産業が盛んなガジプルを目指した。ダカから今日の目的地ロングブルに向かう道は、現代版シルクロードといわれるアジアハイウェイの 2 号線 (AH2) の一部となっている。この AH2 は、東京を起点とする AH1 とともにインド北東部のアッサム州から南下してバングラデシュ北東部のシレットを経てダカに入る。そこで西方のインドの主要都市コルカタを目指す AH1 と分かれて北上し、ガジプル、タンガイルを経て大河ジョムナ川を渡り、ボグラを経て、ロングブルに達する。そしてさらに北西に向かい、インド、さらにネパールを抜けて終点のイランに向かうのである⁽²⁾。

しかし、ガジプルに向かう道路はひどい悪路で、私の協力隊時代のダカとクミッラを結ぶ道路と同じ状態だった。大した距離でもないのに、ガジプルに到着するのに何時間もかかった。悪路といっても、狭くて穴だらけ、対向車とすれ違う空間も満足にない、というバングラデシュにありがちな道路ではない。主要幹線道路の整備ということで、ものすごく広い立派な道を建設中なのだが、工事中の中央部は通れないため狭い脇の道を通るしかない。しかもそこは未舗装のでこぼこ道で、のろのろ運転しかできない。対向車が来るとすれ違うのに苦労する。

ようやくガジプルを抜けても、ダカとロングプルを結ぶ主要幹線道路のかなりの部分が工事中で、予想をはるかに超える時間がかかった。ただ、日本などの援助で作られ 1998 年に開通した、今はボンゴボンドウ（ベンガルの友）橋と呼ばれる長さ 5 キロメートルものジョムナ橋のおかげで^③、メグナ川以上に大きなジョムナ川（ブラフマプトラ川）は、あっという間に渡ってしまった。この橋ができるまでジョムナ川は Bangladesh の交通にとって大きな障害だったが、今では 5 分もしないうちに渡り切ってしまう。

今 Bangladesh 全土で工事中の道路や橋、複線化された鉄道網が完成すれば、世界と海路で結ばれた港湾都市チッタゴンと首都ダカ、そして北西部中心地のロングプルは高速道路と鉄道で結ばれ、さらにインドやネパールに抜ける陸路の大動脈が完成することになる。

クミッタとダカ間のハイウェイの周りにはすでに工場がたくさんある。今工事中の道路や鉄道が完成すれば、新たな工場の建設が各地で進む基盤ができる。Bangladesh には近い将来、今のマレーシアやタイ、ベトナムのように、縫製品だけでなく多様な工業製品を生産し世界中に輸出する工業国になって欲しい。今ある縫製工場のように男性だけでなく多くの女性がそこで働くなら、Bangladesh の貧困は大きく減り、社会も変わるに違いない。

もともと、能天気の私とは対照的に、かつて中東で出稼ぎをした苦労人の運転手イブラヒム氏は、「借金してこんなに道路を作ってちゃんとお金を返せるのだろうか」と、心配顔だ。同じ南アジアのスリランカではコロナで主要産業の観光業が大打撃を受け、中国から借金して行った過剰なインフラ投資の返済ができず、デフォルト（債務不履行）状態になって連日メディアは大騒ぎだ。スリランカの今日の窮状は、明日の Bangladesh の姿かもしれない。Bangladesh には、そうなって欲しくないものだ。

ロングブルの農業発展

クミッラで予約したホテルに荷物を置き軽い夕食を取った後、ジャラル氏の婿であるレザウルの実家を訪問した。嫁の父御が来るというので、大変な歓迎であった。レザウルの父親はもう他界していて、レザウルの兄モストファ氏が農業をしながらこの家を守っている。家の造りからすると、農家としては中の上、というところか。米とジャガイモ、トウモロコシ、そして野菜を主に作っているという。

食事のあと雑談タイムになったので、モストファ氏とあごひげを長く伸ばした敬虔なムスリムらしいレザウルの叔父に、この地域の農業について話を聞いた。この叔父は、すぐ近くに住んで農業をしているという。

二人によると、ロングブル県は、今では菅井戸による地下水灌漑が普及し、雨季のアモン稲と乾季のボロ稲の年 2 回の稲作が行われる。雨季に浸水する心配がない高い土地ではさらにジャガイモかトウモロコシが栽培されるという。今生産が伸びているのは、トウモロコシだ。収穫物の値段は米より安い、ハイブリッド品種なのだろう、収量は 1ha 当たり 8 トンにもなるという。米の倍近い収量だ。

そんなに農業が盛んなら、労働力はどうなのですか、足りているのですか？と聞くと、農業労働者は貧困地域のここでも不足しているとのこと。そして、この地域では労働力不足から、農業の機械化が始まっているという。2 年ほど前からコンバインの普及が始まった。トウモロコシの収穫もできる汎用コンバインがこの村にはあるし、稲作が盛んな隣のディナジプル県からも収穫時期にコンバインがくるという。田植え機はまだ普及していないが、近くにある稲作研究所（バングラデシュ稲研究所：BRRI）では、田植え機のデモンストレーションをしている。

ロングブルの出稼ぎ状況

労働力不足が深刻なのにもかかわらず、この地域からは多くの人が私

が今朝までいたクミツラ県などに農業労働者として出稼ぎに行くという。「昔はクミツラ県からこの地域に農業をするために人が来ていたものだ。この近所にもクミツラ県出身の人がいるよ。でも、今はこの地域からクミツラに出稼ぎに行くんだ」と、悔しそうだ。クミツラ県は人口密度が高くて貧しく、かつては人口が比較的希薄なロングプルに出稼ぎや移住者として来ていた。それが、多くの若者が海外に出稼ぎに出るようになって豊かになり、労働力が不足すると、ロングプルのような貧困地域から労働力を吸い寄せるようになったのである。ロングプルからクミツラまで、ジョムナ橋ができた今では夜行バスに乗って 10 時間、一晩で行けるという。私たちが今日辿った道を逆に行くわけだ。400 キロの道のりだが、今建設中の大きな道路が完成すれば、4、5 時間で行けるだろう。

では、海外出稼ぎはどうですか？ロングプルでは少ないですね、と尋ねると、確かに、100 世帯あれば海外で働いている人がいる世帯は 2、3 世帯程度だろうという⁽⁴⁾。しかし、それは、海外出稼ぎを仲介する信頼できる斡旋業者が少ないからだ、安心して行けるなら、出稼ぎに行きたい人は多いよ、という。それが本当なら、この地域からも海外に出稼ぎに行く人はこれから増え、クミツラ県のように変わっていくはずだ。

何度か私が「貧しいロングプル県は、、」と言ったのが気に障ったのか、「ロングプルは貧しくはないよ。クリグラム県、なかでも洪水の地域は貧しいけれど。そのクリグラムの状態も良くなっている」という⁽⁵⁾。本当ならよいが。

② 3月12日。ロングプル市内のホテル、North View

昨日泊まったホテルはエアコン無しのシングルルームで一泊 800 タカ (960 円) と安かったが、設備は古いし部屋もシーツも汚いため、今日はジャラル氏が朝探してきたこのホテルに移った。エアコン無しのシングルの部屋が朝食付きで一泊 1100 タカと高くないし、部屋もシーツも清潔

で快適だ。Wifi も無料で使い放題だ。私のほかにも何人か、外国人が泊まっているようだ。

今日は朝からロングプル市内をまわり、あちこちでヒアリング調査をした。すべて事前のアポなしの飛び込み調査だ。まず、昨日農家で聞いた BRRRI (バングラデシュ稲研究所) を訪ねた。その後、NGO が運営する職業訓練所 UCEP、放浪生活を送るベデの集落、そして TTC (政府の技術訓練センター)、さらに農業機械の販売会社 ACI だ。疲れたが、充実した一日だった。

稲作の新技術

今日最初に訪れた BRRRI は、バングラデシュ人の主食で最重要作物である稲の技術開発と普及に特化した研究所だ。本部はダカの北、昨日通って来たガジプルにあるが、あちこちの県に支所がある。私が調査の拠点としているクミッラ市にもある。ロングプル県は、クミッラ県と違い 8 県からなるロングプル管区 (Division) の中心県だから、ロングプルの BRRRI 支所は当然クミッラ県の支所より大きい。

私達が訪ねた時、重要な会議があるということで主立った職員は不在だったが、圃場技師のチャタジー氏が親切に対応してくれた。彼によると、ロングプルでは 1980 年ごろ地下水を利用した乾季 (冬季) の稲作、つまりボロ稲の栽培が導入され、今は伝統的な雨季の稲作 (アモン稲) を上回る主要な稲となっている。

どんな稲が今増えているか聞くと、一代交配で収量が高いハイブリッド米も普及しており、病気や害虫に強い遺伝子組換えの稲も展示中だという。効果が知られば、農民にも広がっていくだろう。バングラデシュの稲作は、なかなか進んでいる。

また、労働力がここでも不足しているため、農業の機械化が進行している。耕運はすでにトラクターや耕運機で行われているが、3~5 年ぐら

い前からコンバインが増えたという。また、昨日レザウルの叔父から聞いたように、案内された農業機械の倉庫には、田植え機もあった。そのうち、農家の圃場でも見ることができるだろう。

農業機械販売店 ACI 訪問

BRR1 で農業機械販売店の情報も得たため、夕方にはその一つである ACI のロングプル支店を訪問した。ACI は Advanced Chemical Industries Limited. の頭文字で、もともとイギリスを拠点とする医薬品など化学工業の多国籍企業だったがバングラデシュに根を下ろし、今は農業機械や日用生活品など幅広く扱う複合企業（コングロマリット）だ（ACI ウェブサイト）。ACI の農業機械販売店はクミッラ市の郊外にもあり、私も時々話を聞きに行く。

店にいた職員に、コンバインを扱っているかと聞くと、倉庫にたくさんあるから見せるよと、案内してくれた。驚いたことに、数えきれないくらい多くの大型トラクターに交じって、たくさんのコンバインが並んでいた。このロングプル支店では 2014 年から中国製の小型のコンバインを扱っていたが、故障が多く今は扱っていない。今あるコンバインは、日本のヤンマーと中国の Lovol というメーカーのコンバインだ。これが最新のモデルだと、日本では見たことがないようなヤンマー製の大型のコンバインも見せてくれた。値段も高く、中国メーカーのコンバインは 1 台 310 万タカ（370 万円）、日本のヤンマーのコンバインは 380 万タカ（460 万円）もするという。バングラデシュの米の価格は日本の 10 分の 1 ぐらいだし、日本以上に小さな農家が大半だから、農家にとってはとんでもない価格だ。

こんな高いコンバインを農家を買えるのかと聞くと、政府が価格の半分の補助金をだすから農家は買えるんだよ、補助金がなければとても買えないだろう、という⁽⁶⁾。農業は人手不足だし、労賃も高くなっている

から、労働力を節約できるコンバインの需要はかなり多い。1 シーズン（作期）、各県で 8~10 台のコンバインを売るといふ。ロングプル管区にはロングプルとクリグラムも含め 8 つの県があるから、この支店は年間（2 シーズン）150 台ぐらいのコンバインを売ると計算だ。バングラデシュで最も貧しく後れた地域と思っていたロングプルで、こんなに多くの大型コンバインが見られるとは思わなかった。昨日レザウルの叔父が話したように、ロングプルは大きく変わりつつあるようだ。

ロングプルはかつて米の生産が不足し、端境期にモンガと呼ばれる飢饉が頻発した地域だが、乾季のボロ稲が広まったおかげで米の生産や雇用が増え、飢饉や貧困は減ったようだ。しかし賃金がよいダカやクミッタ県などに労働力が流れ、農業は人手不足が進んでいる。そのためコンバインなど必要労働力が少ない農業機械の普及が進んでいるのだ。ACI でもらったパンフレットによると、1 エーカー（0.4ha）の稲田を収穫するのに手刈りだと 21 人の労働力と 8 時間の作業、1 万 500 タカの労賃がかかるのに対して、コンバインの収穫ではわずか 2 人の労働力、1 時間の作業、2,316 タカの費用しかかからない。費用は 78%節約、労働力は 90%節約できると書かれている⁽⁷⁾。実際にはそれほどの費用や労働力の節約は無理だとしても、かなり減りそうだ。

10 年後、またこの農機具店を訪れてみたいものだ。大型トラクターとコンバインだけでなく、田植え機や AI 搭載のドローンなどハイテク農機がショールームに並び、倉庫を一杯にしているかもしれない。

職業訓練学校の UCEP と TTC 訪問

時間は前後するが、BRRI 訪問の後、すぐ近くにある職業訓練学校を二つ訪問した。一つは、NGO が運営する UCEP という職業訓練学校、もう一つは政府が運営する TTC（技術訓練センター）である。

UCEP は Underprivileged Children's Educational Programs の頭文字

を取ったもので、1972年、バングラデシュがパキスタンから独立した翌年に、あるニュージーランド人が創設したという⁽⁸⁾。HPを見ると、「help to learn, skills to earn」がモットーだという。1971年にパキスタンから独立し生まれたばかりのバングラデシュは、前号でも書いたが、戦争の後遺症や洪水、飢饉、政治の混乱などで国全体が困窮し、貧困国家の代表者として鮮烈に世界デビューした。この時、「バングラデシュを救え」キャンペーンが世界中で張られ、援助の手が差し伸べられ、国内の若者だけでなく、先進国から来た人々によって貧困対策のNGOが多数設立された。バングラデシュ人によるグラミン銀行やBRACもそうだし（ユヌス 2008、スマイリー 2010）、UCEPもそうした団体の一つなのだろう。

ここでは、UCEPのロングプル地区の地域マネージャー、イスラームさんから話を聞くことができた。まだ若い、エネルギーで知的な雰囲気のある男性だ。これまで多くの国際援助団体に働いてきたというイスラームさんによると、この技術研修所には、8年生、日本の中学校卒業程度以上の学校教育を受けた若者が入学し、3カ月間、360時間の職業訓練を受ける。コンピューター、電気機械、エアコン・冷蔵庫修理、縫製、溶接、自動車運転など様々なコースがある。常時400人くらいの生徒がいて、年間1500人が修了する。生徒の4割は女性だという。そして、研修修了後試験を受けて合格すれば、様々な企業に就職する道が開かれる。私たちが訪れた日の前日にも、企業の選考会がこの施設内であり、プラスチックや電気、皮革など、18の企業が集まったという。

UCEPについて大まかな話をイスラームさんから聞いた後、研修の様子を見たいというと、快く校内を案内し研修の様子を見せてくれた。まず、女性も含め多くの若者がパソコンを前に一生懸命学んでいる教室に案内された。私は簡単に自己紹介した後、ここで学んだ後、どんな仕事に就くことを期待していますか、と何人かに聞いた。「海外出稼ぎ」と

いう答えを期待したが、「フリーランサーになりたい」という答えが意外に多かった。「エッ?何、それ?」と思ったが、ジャラル氏に聞くと、インターネットが普及した今のバングラデシュでは、インターネットで世界から注文をとりパソコンを使って仕事をするフリーランスの若者が増えているという。後でインターネットで検索すると、確かに「1 時間 10 ドル (1500 円) で、グラフィックデザイン、ウェブサイトの作成、ロゴマーク作成、データ入力などの仕事を請け負います。経験豊富」などと英語の求職広告を載せたバングラデシュのウェブサイトが見つかった。バングラデシュでは、縫製工場の工員のように、一か月働いて給料は1万~2 万タカ (1 万 2000~2 万 4000 円) 程度という仕事が多いから、本当にこれだけ稼げるなら、バングラデシュでは驚くほどの高収入だ。IT 関連の仕事はネット環境さえあれば場所を選ばないから、バングラデシュの隅にあるロングプルでも、こうした仕事ができるのだろう。時代の大きな変化に驚いた。

いくつかの教室を見学した後、NGO (非政府組織) で働くイスラーム氏にとって今の政府はどう見えるか聞いてみた。権威主義化が進む今の政府に対し批判的な答えを予想したが、逆であった。「(ルックイースト政策を掲げて成功した) マハティールがマレーシアを変えたように、バングラデシュも変わることができるという夢を、ハシナ (首相) は私たちに見せてくれた」と今の政権を絶賛した。日本など東アジアの経験から学び多くの外国企業を誘致して発展を続けるマレーシアのように、ロングプルにも近い将来多くの優良企業が国内外から進出し、ここで学ぶ生徒たちも良い職を得られることを祈ろう。

移動民ベデの集落訪問

UCEP に別れを告げ、やはり若者に職業訓練をする政府機関、TTC (技術訓練センター) を目指した。UCEP と同じ道路沿い、すぐ近くに

ある。

TTC の手前まで来て川にかかる橋を渡ると、川沿いの空き地に黒いかまぼこ型の粗末なテントが 50 個ほど並んでいるのが見えた。ベデと呼ばれる移動民の集落である。自動車で長い距離を走っていると、道路沿いや川べりの空き地にベデの集落を見ることがままある。ベデは定住せず、一か所に 1~1.5 カ月くらい滞在し、その周辺の村々を回って毒へび捕りをしたり、へび使いの芸を見せたり、魔術を使った病気の治療などをしてお金をもらい、次の滞在地に移っていく移動民である。数百年前に今のミャンマーからやって来た異民族の子孫だと言われている (Khan 2021)。

案内人のジャラル氏が私に、彼らに話を聞きに行きましょう、と声を掛けた。私の今回の調査の目的は主に海外出稼ぎと農村経済の変化だから、へび捕りの仕事をするベデとは関係は薄そうだ。それに、社会の片隅で怪しげな生業をしている彼らと話をするのは、ちょっと怖い気もする。それでもジャラル氏は、「行きましょう。面白いですよ」、と繰り返し誘う。仕方がないので、車を降り、砂地の地面に足を取られながらベデの集落に向かった。

私たちを見ると、やや年配の男性と若い男性が迎えてくれた。ジャラル氏が私のことを説明すると、話をしてもいいよ、という。ベデの人たちはベンガル人とは異なり独自の言語や宗教を持つと聞いていたが、この集落の人たちはベンガル語を母語とするベンガル人でイスラームを信仰しているという。へび捕りをする方法は、インドから来た仏教徒のベデに教わったという。集落を回ってコブラなど毒へびを退治して僅かなお金をもらったり、見世物のへび使いの芸をしたりするだけでなく、建設労働の仕事など、様々な仕事をしているようだ。子供たちは学校に行っているの？と聞くと、「貧しく放浪の生活をしているから子供たちを学校にやることもできない」と、テントの中にいた若い女性が嘆いた。

海を渡るベデ

どうして放浪生活をしているのですか、定着した生活をしたいくないのですか?と聞くと、「そりゃ、お金があれば土地や家を買って、定住生活をしたいよ。だけど、そのお金がないんだよ」との返事。外国に出稼ぎに行く人もいるけど、行きたくないですか、と男性に聞くと、とんでもない、という顔で、「そんなお金はないよ」という。確かに、海外出稼ぎには最低でも30万タカ(36万円)ぐらいかかると言われているから、この人たちに縁のない仕事に違いない。

そう思った瞬間、私たちのやり取りを聞いていたかまぼこテントの中の一人の中年女性が、「〇〇××!」と私には理解できない言葉を発した。これがベデの人々の独自の言語かと思った時、ジャラル氏が、「△◎△◎!」と、やはり私にはわからない言葉で返した。それ何語?とジャラル氏に聞くと、「アラビア語ですよ。私はアラビア語を勉強したから、少しわかるんです」という。では、なぜこの女性が流暢なアラビア語を話せるのか、と尋ねると、この女性はサウジアラビアの家庭で家事労働の仕事をしたことがあるそうですよ、という。女性に聞くと、2回行ったという。一回の雇用契約は2~3年のことが多いから、4~6年間サウジアラビアに住んでいたことになる。それだけ長くアラビア人の家庭生活すれば、確かにアラビア語が上達するわけだ。

多額の渡航費用がかかる男性と違い、前編で書いたように中東で家事労働に就く女性には渡航費が不要なことが多い。だから、ほとんど着の身着のままの移動生活をしているベデの女性も、海外出稼ぎができたのだ。サウジアラビアの生活はどうでした?と聞くと、「よかった。また行きたい。だけど夫が許してくれないのよ」という。中東で家事労働者として働くバングラデシュ人女性は過重労働やハラズメントなどの被害にあうこともあるが(須田 2020)、幸いこの女性にはそういう悪い思い出はなさそうだ。雇い主に恵まれ安全に生活できれば、女性の海外出稼

ぎにも利点は多い。それにしても、粗末なビニールのかまぼこテントで移動生活をするこの女性が、サウジアラビアの裕福な家庭のメイドとして冷房の利いた部屋で電子レンジや電気掃除機、洗濯機などを手際よく操作しながら働いている姿を想像するとおかしくなった。

20分ほどの短い滞在だったが、ベデの集落に別れを告げた。お礼として200タカ渡すと、高齢の男性は、うれしそうに受け取ってくれた。話を聞きに来る人はたくさんいるけど、お金くれないんだよね、という。男の人も女の人も、気さくでよい人たちだった。この人たちが移動生活を続けるのは、いつまでだろう。ジャラル氏によると、ベデの数は、現在急速に減少しているという。

TTC 訪問

予定になかったベデ集落の訪問で道草を喰ったが、その後すぐ隣にあるTTC（技術訓練センター）を訪問した（Rangpur TTC）。これはバングラデシュ政府の海外出稼ぎ送り出し機関 BMET（バングラデシュ人材雇用訓練局）に所属する職業訓練所で、各県にある。ここで技術を習得した人には海外出稼ぎに出る人も多い。ロングプルではなぜ海外出稼ぎ者が少ないのか、その状況は今後変わるのかを関係者から聞きたいというのが、今回ロングプルTTCを訪問する理由である。

校長など主だった職員は不在だったが、出勤していた職員に話を聞くと、現在150人の生徒が学んでいて、そのうち20%が女性だという。女性は縫製やIT関係のコースに多い。女性向けの家事労働のコースもある。海外出稼ぎ者はまだ少ないが、徐々に増えているという。男性はサウジアラビア、UAE、クウェート、マレーシアに行く人が多く、女性は、サウジアラビアやUAEなど中東が多いというのは、クミッタ県と同じである。

生徒が学ぶ教室も見せてもらった。教室に行く途中、階段の踊り場には女性の海外出稼ぎ者向けに注意事項が書かれた大きなポスターが貼ら

れていた。サウジアラビアに行ったベデのあの女性も、ここで研修を受けたのだろうか。生徒数が多い IT のコースでは、UCEP と同じく、インターネットを利用して仕事をするフリーランス志望の生徒がコンピューターグラフィックの方法を学んでいた。衣服のデザインや製作を学ぶコースでは、20 人ほどの女性が学んでいた。彼女たちに集まってもらい、ここで学んだあとどこで働きたいのかと聞くと、国内だけでなく、海外の工場や会社で働きたい、という女性が多かった。「日本で働きたいですか？」と聞くと、多くが「行きたい！」と大きな声をあげた。

他にも電子機器などいくつかのコースを回ると、数は多くないが、ほとんどのクラスに女性の姿が見られた。分解されたオートバイを組み立てているクラスも見学した。自動車整備工の訓練コースらしい。若い男性に交じって、一人若い女性が熱心に作業をしていた。そこで、なぜこのコースを選んだか聞いてみた。すると、「女性が多く働く仕事は他にあるけど、自動車工場で働く女性は少ないです。だからこのコースを取れば、就職しやすいだろうと思って。」との返事。本気で自動車関連企業で働くつもりらしい。バングラデシュでは自動車もオートバイも急速に増えているから、自動車産業は今後発展が見込まれる産業だ。自動車工場で多くの女性が働く、そんな新しい時代がバングラデシュにも遠からずやってくるのだろう。

TTC で日本語を学ぶ

ところで、この TTC には韓国語と日本語のコースがある。ここで技術を学び、さらに言葉を学んで試験に合格すれば、日本や韓国に出稼ぎに行く道が開かれるのだという。ここで配っているチラシには、日本語の 6 か月のコースで学べば「政府の派遣で日本に介護士や特定技能の仕事で渡航費用なしに働きに行け、帰国時には 100 万タカ (120 万円) の現金が得られる」と魅力的な勧誘文句が並んでいる (Rangpur Karigori

Proshikkon Kendro: Rangpur TTC)。これなら多くの人が日本語を学びたいと思うに違いない。

そこで、韓国語と日本語の教室を見せてもらった。韓国語の教室を覗くと、着任したばかりだという韓国人教師の下で、30人くらいの生徒が熱心に韓国語を学んでいた。教室はいっぱいだ。生徒はみな男性のようだ。日本と同様労働力が不足する韓国は今、積極的に労働者をバングラデシュから受け入れているから、海外出稼ぎの訓練をする TTC に韓国語を教える若者を送っているようだ。私も若い時そうだった、日本の海外協力隊のようなものだろうか。教室の中に案内されて、韓国人の先生に挨拶をした。人の好い若い男性で、この人なら韓国語を楽しく上手に教えられそうだ。

一方日本語のクラスに行くと、ベンガル人の教師は来ておらず、教室は空だった。日本人の日本語教師がこの TTC にはおらず、しかも今のベンガル人女性の日本語教師は家庭の事情で近々やめるといふ。案内してくれた職員によると、日本語の試験は他の言語に比べて難しく、なかなか合格しない。日本に労働者を送り出すには、日本人の日本語教師が必要だ。日本人の日本語教師を送るよう、日本の政府に是非伝えて欲しい、という。私に言われてもなー、と思いつつ、機会があれば伝えます、と答えておいた。今の日本は何事にも慎重で、外国人労働者には初めから高いレベルの日本語能力を要求する。一方、韓国語のコースは4カ月と、日本語コースより大分短い。言語教師も手早く送る。こうした違いが、日本経済が韓国に追い抜かれる理由の一つなのだろう⁹⁾。日本の慎重さも理解はできるが、本気で海外から労働者を受け入れたいなら、韓国のように多くの日本語教師を送るべきだろう。私も退職後は、日本語教師という形でなら、この国の発展と日本の社会に少しは貢献できるかもしれない。悪くない老後の過ごし方のような気がする。

今日は欲張ってあちこち訪問し、いろいろな人から話を聞いた。貧し

いと言われるロングプル管区も大きく変わりつつあることが肌で感じられた。20年、30年後のこの地の姿を見たいものだ。明日はロングプル県で最も貧しい洪水常襲地域を訪問する予定だ。

③ 3月13日。ホテル North View

今日は午前10時から午後2時まで、Zoomでバングラデシュ関係の研究会に参加した。ホテルの無料Wifiの電波が不安定で何度か途切れたが、4時間も報告を聞いたり議論をした。バングラデシュの奥まった地域と日本の各地が繋がっているのは不思議だ。電話もそうだが、インターネットの普及は距離という大きな障害を簡単に取り除いてしまう。日本とバングラデシュは5000キロも離れているのに、参加者がすぐそこにいるように話し姿を見ることができる。

コミュニストが創ったグローバル資本主義企業

研究会の後、近くの食堂で食事(ビリヤニ、3人で500タカ、600円)をして、Karupannya Rangpur(「ロングプルの手工芸品」の意味)という輸出向け手工芸品の工場を訪問した。大きな門を厳重に閉ざした巨大な建物は七階建てで、下から上まで草や木で覆われていて緑の山のように見える。案内してくれた若い広報担当者によると、ロングプルを拠点とするこの会社には5つの工場があり、6000人を雇用している。明日行くクリグラム県にも一つ工場がある。ロングプルのこの工場では3300人が働き、その80%は女性とのことだ。給料は出来高払いで、平均ひと月6000~7000タカ程度とのこと。輸出向け縫製工場の半分程度と低めなのが気になる。それでも、貧困層の生活向上に役立っているのは確かだろう。手作業で工員が作っているのは絨毯やバスマット、クッションカバーなどで、輸出先はスウェーデンの格安家具店IKEAが70%を占めるといふ。IKEAの店は日本にもたくさんあるから、私たちもこの工場で作ら

れた物を使っているのかもしれない。

広報担当者によると、この会社は 1991 年にロングプル出身の創設者により創られ、2002 年からヨーロッパを中心にアメリカ、南アフリカなど世界各地に輸出を始めた。2002 年といえば、ジヨムナ川を渡るジヨムナ橋（今はボンゴボンドウ橋）が開通した数年後だ。この橋のおかげでロングプルと輸出港チッタゴン間の輸送が容易になったことと、この企業の世界展開には関係がありそうだ。

バングラデシュの貧困地域に世界とつながる大きな会社を立ち上げた創設者は、どんな人物なのだろう。広報担当者に聞くと、次のように答えた。「創設者は若い時 Kommunizmus に影響を受け、社会に貢献したいと思い、自分たちの身近にある物で貧しい人が製品を手作業で作って販売するビジネスを始めました。彼はその発想を、刑務所の中で手工芸品を作る作業に従事していた時に得たのです。」

確かにインターネットのホームページには、創設者の言葉として、「コミュニティの、コミュニティによる、コミュニティのための」企業がこの会社のモットーだと書かれている (Karupannya Rangpur Ltd.)。創設者は生粋の Kommunizmus のようだ。それでは、この創設者は、政治運動をして刑務所に入ったのですかと聞くと、「さあ、それは知りません」という。バングラデシュの洪沢栄一のようなこの人は、どんな人なのだろう。会って話を聞いてみたいものだ。

モンガ（飢饉）地域訪問

その後、車で 30 分ほど東に走り、かつてモンガといわれる飢饉が頻繁に起きていた洪水多発地（チョール地区）に行った。暴れ川で知られるティスタ川のすぐ近くにあり、Dumugata Chor と Chor（中州）という名がつく村だから、川に囲まれていることになる。

夕闇が迫る中、車が 1 台やっと通る細い道路の脇にある茶屋の前に車

を置き、近くにいる人たちからこの地区の状況について話を聞いた。この地域の人々はどんな生活をしているのかと聞くと、ここは砂地の土地なので、灌漑しても水が溜まらないため稲は雨季の一回しかできない。そのため乾季には、少ない水で作れるジャガイモやトウモロコシが作られるという。この地域には仕事が少なく、多くの人はクミッラなど仕事が多く賃金が高い地域に出稼ぎに出て、農業日雇い労働など様々な仕事についている。ここでは一日働いて 300~500 タカにしかならないが、クミッラなどで出稼ぎすれば 500~600 タカ (600~700 円) になるという。

貧困女性へのインタビュー

茶屋を出てトウモロコシ畑が広がる村の中を歩いていると、小さな貧しいトタンの家がいくつか並んであった。そこに住む、全くの土地無しだという女性から話をきいた。宅地だけは借りてトタンの家を作って住んでいるが、いつ追い出されるか分からない、という。しっかりした話をする女性だ。日本の中卒と高卒の間に相当する 10 学年 (SSC) まで学校に行ったという。貧しく、夫は私がいつも調査をしているクミッラ県で、化粧品のフェリー (行商) をしているという。週に一度、500~600 タカ (600~720 円)、ひと月 2000~2500 タカ (2400~3000 円) くらいを携帯電話を使って送ってくれるという。前号で紹介した bKash を使うのだろうか。

トタン作りの、小さな家の中を見せてもらったが、裸電球一個で照らされた一間だけの家の中には粗末なベッド以外、家財とよべるものはほとんどない。子供も二人いる。わずかな送金でどうやって生活しているのか。今訪問してきたばかりの工場 Kaupannya Rangpur で働く気はないのかと聞いてみた。彼女によると、そこで働こうと思って工場まで行ってみたが給料が安いうえに遠く、交通費もかかるし、諦めたという。ビリー (安タバコ) の工場が近くにあるが、1 日 8 時間働いて 60~70 タ

かにしかならない。近くにもっとよい工場があればもちろん働く、という。

家事労働者として海外で働く気はないか、とも尋ねてみた。とんでもない、という表情で、女性が海外に働きに行つてひどい目にあつたと聞いた、怖くて行けない、海外で働く男の人もすごい苦勞しているようだ、という。確かに、女性の家事労働者が様々な被害にあつたという情報はバングラデシュでは広く伝わっているし、サッカーのワールドカップがカタールで昨年（2022年）開催された折、スタジアム建設などで出稼ぎ労働者が過酷な労働環境におかれ多数死んだという報道もされている（『日本経済新聞』2022年10月25日）。海外出稼ぎがまだ少ないこの地域では、そうした悪い情報が先行して広まっているようだ。

また話を聞くかもしれないからと、この女性の電話番号を教えてもらい、別れを告げた。外国人だし、何か援助が得られるかもしれないと期待させたら悪いような気もする。前に車を止めた茶屋で甘い茶をすすり、真っ暗になった人通りの多い道を猛スピードで走り、ロングプル市のホテルに戻ってきた。忙しい一日であつたが、あの女性の家族と家の様子が心に残り、すっきりしない夜となつた。

④3月13日。ホテル North View

今日も忙しい一日だった。朝7時半にホテルの食堂でビュッフェ形式の朝食をとり、洪水や川による浸食被害が頻繁に起こりバングラデシュで最も貧しいクリグラム県に行く。ここが今回の調査の最後の目的地だ。バングラデシュの片隅にあるがインドに抜けられるためか、道路は新しく意外によい。クミツラより遅く、田植えが終わって間もない水田や、女性が働く姿も多く見られる収穫最中のジャガイモ畑、それにトウモロコシ畑やタバコ畑が薄もやに包まれて広がる農村風景の中を50キロほど走つた。インドから流れてくる暴れ川ティスタ川にかかる大きな橋を越え、1時間ほどでクリグラム県の中心地クリグラム市に到着した。

農業普及センターでのヒアリング

まだ早朝だが、まず農業普及センターを目指した。バングラデシュの最貧困県として知られるクリグラムの農業や経済の状況、近年の変化、貧困緩和の方法について情報を集め人々の考えを知りたい。対応してくれたのは、ダカの学校で学んだが大都会の喧騒は性に合わず、故郷のクリグラムに戻ってきたというまだ若い職員だ。彼の説明によると、この地域は農業以外の産業が少なく、農業依存度が高い。米や小麦、トウモロコシ、ジャガイモなどが主要作物だ。ここまでの道中、収穫作業中のジャガイモ畑をあちこちで見たが、ジャガイモがこの地域の特産品だという。二十数年前完成したジョムナ川にかかるジョムナ橋が、この地域とダカなど全国を結び付け、この地域をジャガイモの主要産地にしたのだろうか。道路や橋のような交通インフラの整備が貧困緩和に貢献しているのは間違いない。

車の中からたくさん見えたトウモロコシの栽培は、ここ 4、5 年で大きく増えている。作物の中では利益も一番高いという。トウモロコシは、主に家畜や養殖魚のエサになる。栽培が急増している背景には、経済発展で牛やニワトリ、魚などの需要が増え、家畜や養殖魚の生産が増えていることがあるのだろう。その恩恵が、トウモロコシ生産の増大という形で、貧しいこの地域にも届いているわけである。

クリグラムの産業の状況

そうであっても、農業の多少の発展だけでこの地域の貧困が解消するわけではない。工業や商業など非農業部門の発展が必要なのだが、残念ながら、ロングブルに行くのさえ 1 時間もかかるバングラデシュの辺境クリグラム県に工場がやってくるのはしばらく期待できないだろう。実際、クリグラム県にも繊維工場が一つあったが、今は閉鎖されているという。昨日訪れた Karupannya Rangpur のことだろうか。ダカまで遠く、バン

グラデシュで採れる天然ガスのパイプラインもボグラまでしか届いていないから、ロングプルやクリグラムへの安価な燃料の供給は難しい。ここに余るほどあるのは、ジヨムナ川（ブラフマプトラ川）の水と、それが運んでくる砂、そして貧困と過剰労働力くらいのものではないか。

とはいえ、今ではこの地域の過剰労働力が、バングラデシュの発展を支える貴重な労働力になっているのだから皮肉である。ここクリグラムなどバングラデシュ北西部の貧困地帯から、大量の労働力が、比較的近いボグラ県などだけでなく、急成長を続ける人口 2300 万人のダカ都市圏や、発展の原動力である主力輸出品のアパレル（既製服）をつくる繊維産業の工場に、そして同じく発展を支える海外出稼ぎ地域のクミッラ県やチッタゴン（チョットグラム）県など、500 キロ以上離れた地域にまで出稼ぎに出ていくのだ。若い女性も、縫製工場の労働者などとして、たくさん出稼ぎに出ていく。私がクミッラの調査村で見る農業労働者や建設労働者、クミッラ市でたくさん見るリキシヤ引きなどには、この地域から来た人が多い。

人がよさそうなこの若い農業の技術職員によると、土地なしなど貧しい人になる農業労働者の賃金は、昼食がついて一日 400～500 タカ、女性は 300～400 タカだという。イスラム教徒が多いバングラデシュでは女性が農業労働者として田畑で働くことはまれだが、この地域ではジャガイモの種イモの植え付けや収穫だけでなく、田植えや稲刈りも女性がするという。

農業機械化の進展

驚いたことに、クリグラムから出稼ぎ者が増える中で、この地域でも労働力が不足しているのだという。女性がジャガイモ畑や水田で働き始めたのもそれが原因の一つではないか。そして、農業における労働力不足に対応するため、この地域でもコンバインハーベスターが入り始めて

いる。ロングブル市内の農業機械販売店で見たコンバインも、ここまで来るのだろうか。倉庫には田植え機もおかれていた。まだ農民にデモ中だというのが、人手不足がさらに進めば、やがて農家に受け入れられていくのだろう。

チョール（中州）の村訪問

市内の農業普及センターを出ると、東に向かい、大河ジョムナ川（ブラフマプトラ川）の水流が作るチョール（中州）地帯の村を目指した。この地域では、ジョムナ川の川幅は端から端まで 15 キロにもなり、その間は無数の細い川に分かれ網の目のようになっている。雨季になるとヒマラヤ山脈に降った大量の雨がこの川に流れ込み、それぞれの川は大きく膨れ上がって頻繁に流れを変え、中州にある家屋の敷地や田畑を浸食して押し流し、新たな中州を作る。農作物も頻繁に被害を受け、安心して住める土地ではない。中州にある家はほとんどトタンの家で、確かに貧しい地域だ。レンガ造りの家はほとんどない。もっとも、洪水でいつ流されるかわからないので、レンガの家を作る意味がないのかもしれない。

舗装はされているもののくねくねとした細い農村道路を通り、ようやくブラフマプトラ川の河畔の村にたどり着いた。乗ってきた車を降り、バザールを抜けて近くの集落に向かった。同じ方向に向かって歩く若い男性にジャラル氏が声をかけた。親切にも、村を案内してくれるという。30 歳で、学校教育を全く受けたことがなく、文字は自分の名前を書けるだけだというのが、おおらかで人柄がよく、頭も良さそうだ。トウモロコシ畑を抜け、砂地に足を取られながら一緒にジョムナ川の河岸まで行った。川の向こうはもうインドだ。本当に大きい。クミツラからダカに向かうときメグナ川を渡る。それも大きいですが、ジョムナ川の大きさはその比ではない。今は乾季で水が少ないが、雨季にこの川はどこまで大きく

なるのだろう。

その後、これが俺の家だよ、と川のすぐ前にある家に招待してくれた。1メートルほど盛った砂の上にトタンで作った一間だけの小さな家に、妻と子供、妻の母と一緒に住んでいる。洪水で去年はここまで水が来たよ、と床から1メートルくらいの高さの壁を指さした。「今年また水がきたら、もうここを出ていくしかないね」、という。どこに行くの？と聞くと、「どこか別の中州（チョール）へ」、という。洪水が来ない高い土地は、地価が高くて手が出ない。洪水が来て住めなくなったら地主に土地を返すという契約で別の中州に土地の権利を買い、そこに移って住むのだという。暴れ川ジョムナ川とその周辺に住む人々の、追いかけてこのような生活が続くのだ。

ロフィックの生活

ロフィックというこの男性は、子供の時丁稚奉公をし、溶接の技術を学んだ。チョットグラム（チッタゴン）の道路の建設現場に溶接の仕事で出稼ぎに行ったこともある。腕には自信があるという。だが、出稼ぎに行った仕事先で請負人に給料をピンハネされ、それに怒って村に帰ってきてしまった。「俺にだってプライドがあるよ。一生懸命働いたのに、約束の賃金をもらえないなんて、我慢できなかったんだ」、という。

全くの土地無しなので、ここでは農業はせず、ダカに出稼ぎに行ったり、リキシャ引きの仕事をしたり、この地域にいるときはプラスチック容器の行商などをしてその日暮らしをしているという。ダカでリキシャ引きをするときは、リキシャ置き場に寝泊まりして暮らす。一日500～600タカ（600～720円）の収入があり、食事やリキシャの借り賃を差し引くと、手元に1日300～400タカ（360～480円）残るといふ。

「チッタゴンで働いていたときの中国人の監督がいい人でね。これにくれたんだよ」と、つま先に鉄板が入った工事用の靴を懐かしそうに見

せてくれた。日本に生まれていたら、ロフィックはまわりから信頼され、企業や社会のリーダーとなる人物だろう。こういう人はバングラデシュに少なくないのに、その力を活かさないのはもったいない。彼のような人が日本に来て働いてくれるなら、人手不足の今の日本にとってもありがたいことに違いない。

チョール地帯の貧困緩和に必要なこと

ロフィックに、ここに住む人々の生活改善に必要なことは何だろうと聞いてみた。彼の答えは、次のように明快だった。まず、洪水の被害を防ぐ堤防の建設。そして川が流れを変えないように川底の砂を浚渫すること。また、女性が家にいながら収入を増やすことができるヤギや牛の飼育の支援、そして裁縫など内職の仕事。加えて、雇用の場として工場の建設だ。

海外出稼ぎは？と問うと、この地域では、海外出稼ぎは非常に少ないという。中東やマレーシアへの出稼ぎには、少なくとも 35~40 万タカ（42 万~48 万円）というお金が必要だ。土地もなく、彼のような 1 日の賃金が 400 タカ（480 円）という日雇い労働者の生活の中から、とても出せる額ではない。

ロフィックも、その家族も、私が去る時、長く手を振って見送ってくれた。彼らの生活がよくなり、家族一緒に幸せに暮らせるようにと祈らずにはおれない。

農村開発の主役 BRAC 訪問

ロングプル管区調査の最重要目的地だったクリグラム県の洪水常襲村の調査が終わった。これが県庁所在地の中心部かと思うような小さな繁華街の食堂で遅い昼食を取り、帰路についた。町の中心から少し離れると、道沿いにバングラデシュ最大の NGO、BRAC のクリグラム支店の看

板があったので、そこを飛び込みで訪ねた。BRAC は、主にマイクロファイナンス（貧困者を対象とした小規模金融）を中心に活動する NGO である。私が協力隊時代に勤めていた BARD が主導する政府系農協に代わり、グラミン銀行や ASA などとともに、1980 年代後半から農村開発を牽引する巨大 NGO に成長した。BARC は海外出稼ぎにも理解があり、海外出稼ぎ融資や出稼ぎ帰国者支援プログラムなども実施している。私もダカの本部やクミッタ県の支店など、何度か訪問したことがある。

マイクロファイナンスの仕組み

私達が訪ねたのはフィールドワーカーが村の集金からもどって来た時点で、5 人ぐらいの職員が小さな部屋に集まって集金したお金の勘定を熱心にしていて、邪魔にならないように彼らに話を聞くと、BRAC のマイクロファイナンスの仕組みは以下の通りだ。BRAC からお金を借りたい人達、主に貧しい女性は 10 人から 30 人が集まってグループを作る。金利はフラットレートで 12% で、実質 24% の金利となる⁽¹⁰⁾。物価上昇率 5~10% ぐらいのバングラデシュでは、かなりの高利だ。高い金利、メンバー間の相互監視と職員のしばしば強引な取立てによる高い返済率、それが生み出す高い収益、それがバングラデシュのマイクロファイナンスの成長を支えてきた。

こう書くと、マイクロファイナンスや NGO は高利貸しの悪者のように聞こえるかもしれないが、普通の銀行は担保を持たない貧しい借り手にお金を貸さないし、バングラデシュの銀行は通常町にあり、農村住民、特に行動が制約される農村の女性には遠い存在だ。村人に近い農村の金貸しなどは年利 60~120% にもなる高利を要求するのが普通だった。だから、気軽に借りられるマイクロファイナンスの普及で多くの人々が恩恵を受けているのは確かだ。問題はあるにしても、農村開発における NGO とそれが提供するマイクロファイナンスの貢献は大きい。

借入金の主な用途

職員に話を聞くと、借入の目的として一番多いのは家の建設、二番目は娘の結婚資金、三番目は小ビジネスの資金、四番目は自動車購入で、その他は稲作や牛の購入など農業用の借入が多いという。自動車（auto）は、タクシーとして使われる小型三輪自動車のことだろう。

住宅建設やビジネス用途の借入は分かるが、娘の結婚資金のための借入が 2 番目に多いというのは、大きな問題だ。前号でも書いたが、バングラデシュでは、ムスリムもヒन्दゥー教徒も、結婚するときには新婦側が多額の持参金（ダウリー、ジョウトック）を新郎側に払う慣習がある。よい男性に娘を嫁がせるためには、新婦側は多額の持参金を新郎に与えなければならない。NGO のマイクロファイナンスが普及したためお金の調達が容易になり、NGO から借金をして持参金を工面することが横行しているようだ。NGO や政府は、持参金の慣習をやめさせようとキャンペーンを張っているが、男女の経済的貢献度に大きな格差がある以上、やめさせるのは難しい。

確実に効果が期待できる解決策は、女性が働いて家族に現金収入をもたらす経済的に貢献できるようにすることだ。そうすれば女性は家族にも社会にも大事にされ、多額の持参金を男性側が求めることはなくなるはずだ。ロングプルの職業訓練所で見たとおり、また昨日貧しい村で話を聞いたように、働きたいと思っている女性は、この貧困地域にも多い。ダカやクミッタなどの縫製工場への出稼ぎ、また海外出稼ぎも解決策の一つだが、女性が安心して働ける工場を近くに作るのが一番の解決策だろう。道路や鉄道網など交通インフラの整備と世界市場に直結する工場・企業の誘致や設立が最善の策だ。昨日訪問した Karupannya Rangpur の創設者のようなコミュニストの心を持った資本家の多くの出現に期待したい⁽¹¹⁾。

クリグラム県が貧しい理由

ところで、この地域で活動する NGO ならこの地域の実情をよく知っているだろうと思って、クリグラムが貧しい理由、そしてクリグラムで海外出稼ぎ者が少ない理由について職員たちに聞いてみた。

まず、クリグラムの貧困の原因だが、①洪水の被害がある、②工業が少ない、③人口が多く収入が少ない、④仕事をする女性が少ない（女性には働きたいという気持ちはあるが、働く場がない）、そして⑤交通事情が悪くクリグラムから他の地域への移動が容易でないことだという。

では、海外出稼ぎはどうか。クリグラムの海外出稼ぎ者はずいぶん少ないがその理由は何ですか、と尋ねてみた。職員によると、外国に働きに行きたい人は多い。実際、ここでも増えている⁽¹²⁾。しかし、その数は、クミツラほどではない。その最大の理由は、海外出稼ぎには多くのお金が必要だからだ。前にも書いたが、海外出稼ぎには、男性労働者の場合、最低でも 30 万タカほどかかる。この地域は貧しいため、地価は 1 ビガー (0.33 エーカー) あたり 20~30 万タカほどにしかない。これがクミツラ市に近い私の調査村だと、同じ面積の農地の値段は 700 万タカにもなる⁽¹³⁾。クミツラ県では海外出稼ぎで稼いだ金で土地を買う人が多く、地価が高騰している。だから少ししか農地を持たない貧しい農家でも僅かな土地を売るだけで容易に海外出稼ぎに行ける。それに対して、ここクリグラムでは、出稼ぎ費用を工面するためには、相当広い土地を売らなければならない。悪質なブローカーも多く、騙されてお金を失ったら生活が立ちいかなくなる。そんな大きなリスクを負ってまで海外出稼ぎに行く人は、この地域ではまだ少ないのだという。

様々な理由でクリグラムの貧困はこれまで深刻で、クミツラのように多くの人々が海外に出稼ぎに行くことはなかった。それでも、この地域も大きく変わりつつあるようである。

外国人がここまで来ることは少ないのか、お茶やビスケットなど出さ

れて歓待され、記念写真まで一緒に撮って、BRAC の小さな支店を出た。はじめは、外国人が粗探しに来たのかと警戒されたようだが、打ち解けているいろいろ話が聞け、よい調査になった。

コンバイン農家

これで最終目的地クリグラムでの調査もほぼ終了だ。そう思いながら、日が暮れ始めた細い道路をロングプルに向かって猛スピードで走っていると、道路わきの家の庭に、一台のコンバインハーベスターがあるのが目に留まった。考えてみれば、実際に村にあるコンバインを見るのは初めてである。そこで、持ち主に話を聞こうと、運転手のイブラヒム氏に無理を言って車を止めてもらった⁽¹⁴⁾。

その家は、最近できたばかりなのか、道路わきに建ち、花や野菜がたくさん植えられた広い庭園を囲うようにいくつかの小さな家が建てられた、なかなかモダンできれいな家だ。均分相続の慣習があるバングラデシュでは、兄弟達が共同の中庭を囲むようにそれぞれの家を構えることが多い。この家の持ち主は、どんな人なのだろう。普通の農家、という雰囲気ではない。きれいに手入れがされた庭園に面した家から出てきたまだ若い男性は、私たちを庭園の入口にある接客用の建物に導いて、お茶を出してくれた。客間には、この家の主人だった人だろうか、軍人らしき人の遺影が壁に飾られている。コンバインの持ち主は、この軍人の息子のようなだ。

ハシェムさんというコンバインの持ち主は、35 歳ぐらいだろうか。2015 年に学校を卒業しサラリーマンになったが、仕事は 3 か月でやめてしまったという。確かに、おとなしいというか、人を押しのけてバリバリ仕事をするタイプの人ではなさそうだ。幸い豊かな家なので、お金には困らず、ビジネスの道に進んだようだ。今では、自分でも 1 エーカー (0.4 ヘクタール) の農地を経営する傍ら、コンバイン 1 台の他に田畑の

(70)

耕運と運搬に使うトラクターと灌漑用の浅菅井戸（STW）を持ち、その貸出サービスで生計を立てている。

コンバインは、3年前の2020年にヤンマー製のものを285万タカでACIから買ったという。このうち半分は補助金で、実際に払ったのはほぼ半分の145万タカだった。2020年といえば、コロナで農業労働者の出稼ぎも制限され、主食のコメの生産確保に危機感を持った政府が、本気でコンバインの普及促進を始めた時だ（Md Mostafizar, et al. 2021）。ハシムさんは、今所有している稲と小麦専用のコンバインだけでなく、トウモロコシも収穫できる汎用のコンバインや田植え機の購入にも関心があり、近い将来、田植え機も買いたいという。こういう豊かな農民層が、灌漑用菅井戸から始まって、トラクター、コンバイン、さらには田植え機など農業機械の普及の推進役になっているのだろう⁽¹⁵⁾。

コンバインの活用法

ハシムさんは、コンバインは、自分と親戚の土地15エーカー（6ha）で収穫作業に使うほか、他の農民の土地でも収穫作業を請け負っている。自分と弟、もう一人の3人で運転をするという。農業労働者を雇って人力でやるよりもコンバインでするのが安くできるし時間の節約にもなるので⁽¹⁶⁾、農家の需要は大きい。農家が集まってまとまった土地10エーカーの注文があれば、トラックにコンバインを乗せて出向き、収穫サービスを提供する。近くの4カ村（ユニオン）に100人以上の顧客がいるという。

ただ、稲と麦の収穫に使うだけなので、1年間で使用するのは2カ月に過ぎないという。バングラデシュは地域によって収穫の時期がずれているから、コンバインをあちこち持って行って収穫して回れば利益はずっと増えるのではないですか？数日前までいたクミッラの農村にはロングプルのほうからコンバインが来ると聞きましたよ、と言うと、「確かに、

ロングプル管区だけでなく、クミッラやシレットなどあちこちから収穫に来て欲しい、コンバインを貸して欲しいという依頼があります」、という。ただ、自分たちは他のビジネスもしていてここを離れられないし、他人に貸すと丁寧に使ってもらえず壊れる可能性もあるので、躊躇しているのです、という。このような問題を解決した人が、あるいは気にしない人が、まだ高価で数が少ないコンバインをバングラデシュのあちこちに運んで、コンバインによる収穫作業を広めているのだろう。ハシエムさんは、自分のコンバインを、もっと効率的に使うことができるだろうか。勤め人には向かなかった内気なハシエムさんだが、農業機械の利用サービス業者として成功することを祈りたい。

日が沈みかけ、夕闇が迫る細い農村道を車は猛スピードで走り続けた。これでバングラデシュ最貧困地、クリグラム県の調査も終わりだな、と思いながら、クリグラム県出身の二人の知人のことを思い浮かべた。私の調査の拠点は前編にまとめたクミッラ県だが、そこでの知人にクリグラム県出身者がいる。今日クリグラムにいながら、彼らの家はどの辺にあるのだろう、などと考えたりもした。

軍の諜報員アユーブ氏

その一人は、軍の諜報員アユーブ氏だ。35歳ぐらいだろうか。私がいつも滞在する BARD (バングラデシュ農村開発アカデミー) はインドのトリプラ州との国境から 10 キロほどしか離れておらず、政府にとっては敏感な地域らしい。BARD のすぐ脇には軍の駐屯地 (カントンメント) もある。そのせいか、BARD のゲストハウスに泊まる外国人の素性や行動を把握し監視するのが彼の役目のようだ。

コロナが広まる数年前、私が BARD ホステルのレセプションにいくと、私のことを根掘り葉掘り受付係に聞いている彼にたまたま会い、彼の存在を知ることになった。話には聞いていたが、外国人を監視する諜報員

を見るのは初めてだった。彼は私を見ると、困ったな、という顔をしたが、「外国人に問題が起こるとバングラデシュ政府はとても困るので、あなた達の安全を守るため私がいるのです」と言い訳した。

確かにその何年前か、2015年には私が今いるロングプルで農村開発に携わる日本人がイスラム国（IS）の武装組織を名乗るテロリストに路上で殺されたし、翌2016年にはダカでやはりイスラム国を名乗る武装集団のレストラン襲撃事件があり、援助関係の日本人男女7人を含む18人の外国人が犠牲になった。このようなことが続けば、外国企業や援助機関がバングラデシュから遠のくのは目に見えている。そうなれば、せっかく成長の軌道にのったバングラデシュの発展の道は、再び閉ざされてしまう。隠れて行動を監視されるのはうれしくないが、バングラデシュにいる外国人を監視・保護しようという政府の考えは、理解できないわけではない。

このような経緯で、クリグラム出身の諜報員、アユーブ氏と知り合いになった。私は無害な人間と安心したのか、一度彼の家にも呼ばれ、食事をごちそうになった。若い優しそうな妻と、小さなかわいい息子がいた。

クリグラム出身ですよ、と彼にいうと、なぜかうれしくなさそうな顔をする。クリグラムは貧しい県だと知られているから、侮辱された気持になるのだろうか。そんなことはない。今は乾季だが、チョール（中州）の周辺が一面水をたたえる雨季には、さぞかし美しい景観が広がることだろう。クリグラムには教育を受けた人が多く、著名な経済人もいとジャラル氏という。日本でいえば、昔は貧しかったが教育水準が高く多くの知識人や経済人が輩出する長野県のようなところだろうか。今度会ったら、彼の故郷について、じっくりと聞いてみたいものだ。

農業労働者、バレック

もう一人私がよく知っているクリグラム出身者は、調査村の近くに住んでいる出稼ぎ農業労働者のバレックだ。彼はクリグラムの洪水常襲地帯、ナゲシワリ郡の人である。故郷に仕事が少ないものだから、一年のほとんどをクミッタ市の近くで日雇い農業労働者として過ごしている。ロングプル地域からクミッタにやってくる出稼ぎ農業労働者の多くは、田植えや稲刈りの農繁期にやってきて、それが終わると故郷に帰るが、バレックのように一年の大半をクミッタで過ごす出稼ぎ者も少なくない。彼らは、前号に書いたように集団で農家の小屋を借りて飯場のような集団生活をしたり、学校などの軒下で野宿しながら暮らしたりする。田植えや稲刈りが終わった農閑期には田んぼの草取りをしたり、泥が溜まった池の浚渫をするなど、何でも屋の日雇い労働者として働き、稼いだお金を故郷の家族に送り続ける。

以前、クリグラムなどロングプル地域から来る農業労働者に聞き取り調査をしたことがあり（須田 2018）、50歳ぐらいの農業労働者バレックと知り合いになった。彼は、私の調査に非常に協力的で、ヒアリング対象の出稼ぎ労働者を集めてきたり、帰省したとき、故郷ナゲシワリ郡の洪水の様子やトタンでできた貧しい家々の写真を撮ってきてくれたりした。私が、クミッタから遠いクリグラムをいつか訪れたいと思うようになったのは、バレックとの出会いがあったからといってよい。ナゲシワリ郡までは更に遠く、今回は行けなかったが、クミッタの調査村付近にたくさんいるクリグラムの出稼ぎ農業労働者の故郷の暮らしが、ここに来て少しわかった気がする。

⑤3月16日早朝。ダカ市内、シャハバークの BARD ホステル

ジョムナ川に架かる第2の橋

昨日は一日かけて、来た道に戻ってロングプルからダカに向かった。

ジヨムナ川にかかる橋のすぐ脇には、線路の複線化を可能にする鉄道専用の橋が建設中であった。作っているのは、日本の企業だという⁽¹⁷⁾。これが完成すれば、鉄道により迅速で大量のコンテナ輸送ができ、ロングプルやクリグラムなどの工場で作った製品がスムーズに港湾都市チッタゴンに運ばれ、世界に輸出されることになるだろう。人や物の流れが容易になり、安く良質の労働力を求めて世界から企業がどんどん進出すれば、クリグラムなどバングラデシュの貧困地域の生活は大きく改善するだろう。そう思うと嬉しい。物流がスムーズになれば、貧困地域の農業も盛んになるだろう。もちろん、発展に歪みはつきもので、環境問題なども起きる可能性が高い。それはうまく解決して、よい方向に進んで欲しいものだ。

ダカの喧騒

発展に伴う歪みと言えば、昨日ダカへ向かう道は、ガジプルあたりから車の大渋滞で、大変だった。市内も大混雑で、ほとんど車が動かない。道路の脇には、高いビルが立ち並び、華やかなネオンサインの広告がきらめいている。私の協力隊時代に隊員宿舎があったシャモリという地区を通ったが、35年前ののんびりした風景とは、まったく違う。ほとんど自動車が走ってなかった35年前は、リキシャ引きのお兄さんと雑談しながら、風を受けのんびりこの広い道の真中をリキシャで走ったものだ。

それが今、日本の中古車、それもほとんどトヨタ製の中古自動車が、この広い道路を埋め尽くしている。歩いたほうがよっぽど早いと思いつつ、ようやく目的地の BARD ホステルに到着した。私が協力隊員だったとき配属されていた BARD の職員はダカで会合などを頻繁にするので、BARD は事務所兼宿泊所として小さなホステルをここに持っている。今の私は BARD の職員ではないが、昔のよしみで時々ここを宿代わりに使わせてもらうのだ。

コルカタ行きの飛行機に乗るため今日の昼 12 時半にはここを出発しないといけない。明日の今頃はもうインドだ。

⑥3月16日午後。ダカ空港搭乗口

コルカタ行の飛行機（インディゴ航空）の搭乗開始を待っている。今朝ホテルから空港へ行く CNG（小型三輪タクシー）に乗るまで、30分ほどダカの中心街シャハバークを歩いた。シャハバークはダカの古い中心地にあり、ダカ大学、ニューマーケットなどに近いビジネス街だ。日本で言ったら、東京の丸の内や銀座界限、というところだろうか。

前回ここに来たのは4年ほど前だが、その時に比べ、大きく変化していた。コンチネンタルホテル、医科大学などの大きな新しい建物が並び、日本の援助によるメトロ駅も建設中だ。驚くような変化が急ピッチで進んでいた。

バングラデシュは、これからマレーシアやタイのようにうまく離陸していけるだろうか？若い人たちには高等教育が普及し、世界に通じる若い人材が育ちつつあるのを感じる。この点、これから行くインドが一步も二歩も進んでいるが、インドにできてバングラデシュにできないことがあるだろうか。タゴールやマハラノビス、アマルティア・センなどインドを代表する多くの知識人が輩出したコルカタとダカは300キロほどしか離れていないし、住民も同じベンガル人だ。35年前初めてバングラデシュに来たときには想像もできなかった光景が今自分の前にある。成長の軌道に乗ったバングラデシュの変化は、今後加速していこう。60歳の自分には難しいが、20年後、30年後のバングラデシュの姿を見たいものだ。

これからいよいよ最後の目的地インド西ベンガル州へ。コルカタに行くのは、何年ぶりだろうか？

3. おわりに

以上が、2023年3月に実施したバングラデシュのロングプル管区での調査の記録である。この地域は、貧困国とされるバングラデシュのなかでも最も貧しい地域であり、その原因と動向、貧困緩和の道筋を明らかにすることには大きな意味がある。この課題を、主に現在のバングラデシュの成長の原動力となっている輸出向け製造業の発展と海外出稼ぎの観点から、ロングプル管区の農村で生活する人々の姿を読者に伝えながら解明したい、というのが、本稿の目的であった。輸出向け製造業と海外出稼ぎ以外にも重要だと思われる、農業の変化とジェンダーの問題、また日本とバングラデシュの関係についてもできる限り注意を払った。なお本稿に登場する人物の名は一部を除き仮名である。

本稿のささやかな試みが、読者のバングラデシュ理解を深める上で一助となることを期待したい。次編は、ベンガルを構成するもう一つの地域、インド西ベンガル州の農村調査の記録である。

(本稿は、科研費による研究(課題番号 19H00554)の成果の一部である)

注

1. メグナ橋は1991年に、グムティ橋は1995年に開通した。
2. AH1は東京を起点とし、ヨーロッパの入口である、トルコとブルガリアの国境を終点とする。AH2はインドネシアのデンパサールを起点とし、AH1と再び合流するイランのコスラヴィを終点とする。
3. 日本が主導するアジア開発などが資金を出し、韓国企業の現代重工業が建設した。ボンゴボンドウ(ベンガルの友)はハシナ現首相の父でバングラデシュ初代首相ムジブル・ロホマンの愛称。権威主義化を進める現政権下でボンゴボンドウの写真や絵があちこちで見られ、その名を冠した建物なども増えている。
4. 2022年センサスとBMETの統計から筆者が計算したところ、2022年の1年間でクミッタ県があるチョットグラム管区からは18.3世帯に一人、クミッタ県からは13.3世帯に一人の割合で海外出稼ぎに出たが、ロングプル管区全体では196世帯に一人、ロングプル県は216世帯に一人、クリグラム県は155世帯に一人の割合でしか海外出稼ぎに出ておらず、非常に大きな地域差がある。

5. 政府の統計によると (BBS 2023, p. 499)、ロングブル管区の 2022 年の貧困率 (Head Count Ratio) は低位貧困線で 10.0%と全国平均 (5.6%) の倍もある。クミッタ県があるチョットグラム管区は 5.1%である。ただし、2016 年の 30.5% (全国平均は 12.9%) と比べると、ロングブル管区で貧困緩和が急速に進んでいることがわかる。クリグラムの貧困率は 2010 年ではほぼ 50%であり、ロングブルの 30%弱と比べ、貧困がより深刻である。
6. ACI でもらったパンフレットによると、日本のヤンマー製コンバイン AG600 を購入する場合、補助金は、バングラデシュ全土で価格の 50% (145 万タカ)、災害が多いハオールと海岸部では 70% (203 万タカ) にもなる。
7. 注 6 と同じパンフレットによる。
8. UCEP の詳細については、UCEP Bangladesh のホームページ (<https://www.ucepbd.org/>) を参照のこと。
9. 全国一律の韓国の最低賃金は日本で最も高い東京の最低賃金を既に上回っている。(『日本経済新聞』2023 年 7 月 20 日)。
10. フラットレート (flat rate) とは、借入時の金額に掛ける金利である。例えば 10 万タカ借りてフラットレートの金利が 10%なら、利子 1 万タカを加えた 11 万タカを借入者は 1 年後に完済する。しかし、BRAC やグラミン銀行のように定期的な分割払いで返済する場合、借入残高は徐々に減少していく。この場合、1 年間の平均借入額は 5 万タカだから、5 万タカの平均借入額に利子 1 万タカを払うことは、実際の金利 (実質金利) としては 20%ということになる。この実質の金利を declining balance rate などと呼ぶ。
11. グラミン銀行創設者のムハマド・ユヌスは特定の社会的目標の追求のために行われるビジネスをソーシャル・ビジネスと呼んでいる (ユヌス 2008)。
12. BMET (バングラデシュ人材雇用訓練局) の統計によると、クリグラム県から 1 年間に海外出稼ぎのため出国した人は、2021 年に 1976 人であったが、2022 年に 3920 人、2023 年には 7061 人となり、急速に増えている。
13. クミッタ市に近い調査村 (ミルプル村) でのヒアリングによると、よい農地だと 1 ビガール当たり 660~825 万タカとなり、クリグラムの農地よりはるかに高い。純農村であるもう 1 つの調査村 (ガジブル村) でも 1 ビガール当たり 100~230 万タカとクリグラムの 5~10 倍する。
14. ロングブル市とクリグラム市を結ぶ道路は、途中でラールモニルハート県を通る。この農家があるのは、ラールモニルハート県であった。
15. クミッタにある ACI 支店のヒアリング (2023 年 9 月実施) でも、コンバインの購入者は、豊かな農家とのことであった。
16. 手刈りなら 1 エーカーあたり 7000 タカかかる収穫作業をコンバインなら 5500 タカでできるという。また、ACI のパンフレットによると、1 エーカーあたり手刈りだと

(78)

21人の労働者で8時間かかる作業が、コンバインだと2人の労働力、1時間でできる(Yanmar AG600のパンフレット)。ハシエムさんの話では、圃場の面積が小さいので実際にはその倍ぐらい時間がかかるというが、それでも手刈りよりはるかに短時間で収穫作業は終わる。

17.この橋の建設工事は、大林組、IHI インフラシステムなど日本企業が請け負っている。

参考文献

ACI Bangladesh Website (<https://www.aci-bd.com/>)

Bangladesh Bureau of Statistics (BBS) . *Statistical Yearbook Bangladesh 2022*. BBS, 2023.

BMET (Bureau of Manpower, Employment and Training) , “Overseas Employment (District wise-Monthly) in 2021, 2022, 2023.” (<https://old.bmet.gov.bd/BMET/statisticalDataAction>)

Karupannya Rangpur Ltd. (<https://karupannya.com.bd/>)

Khan, Jainal Abedin, last edition. “Bedey”, *Banglapedia*, 2021. (<https://en.banglapedia.org/index.php?title=Bedey>)

Md Mostafizar, et al. “Farm Mechanization in Bangladesh: A review of the status, roles, policy, and potentials”, *Journal of Agriculture and Research*. Vol. 6., 2021.

Rangpur TTC Website (<https://rangpurttc.gov.bd/>)

UCEP Bangladesh, (<https://www.ucepbd.org/who-we-are/>)

大橋正明ほか編著『バングラデシュを知るための66章』第3版、明石書店、2017年。

須田敏彦「コロナ後のバングラデシュ農村を歩く—フィールドノート・クミッラ県編—」『東洋研究』第231号、2024年1月、pp.57-102.

—「増加するバングラデシュからの女性家事労働者」『大東文化大学紀要』社会科学、58号、2020年3月、pp.77-96.

—「バングラデシュにおける農村間出稼ぎ労働者の生活：コミラ県での農村調査から」『大東アジア学論集』第18号、2018年、pp. 57-72.

スマイリー、イアン著、笠原清志監訳『貧困からの自由 世界最大の NGO—BRAC とアベッド総裁の軌跡』明石書店、2010年。

『日本経済新聞』「カタールW杯欧州で抗議拡大 移民労働者の人権懸念」2022年10月25日。

—「韓国最低賃金2.5%増 24年、東京の水準上回る」2023年7月20日。

長谷安朗・三宅博之編『バングラデシュの海外出稼ぎ労働者』明石書店、1993年。

村山真弓・山形辰史編『知られざる工業国バングラデシュ』アジア経済研究所、2014年。

ユヌス、ムハマド著、猪熊弘子訳『貧困のない世界を創る—ソーシャルビジネスと新しい資本主義』早川書房、2008年。